

「患者状態適応型パス統合化システム開発研究」中間成果報告シンポジウム開催 標準コンテンツ開発で進む 本格的臨床活用への途

9月9日、早稲田大学理工学部大久保キャンパス(東京都新宿区)にて、平成18年度厚生労働科学研究費補助金総合研究事業「医療安全と質を保証する患者状態適応型パス統合化システム開発研究」中間成果報告シンポジウムが開催された(主催/同開発研究班および日本品質管理学会医療の質・安全部会)。

患者状態適応型パス(PCAPS)は2つのツールからなる。1つはユニットの連結を示した臨床経路の俯瞰図であり、対象疾患について想定される治療のおおまかな流れと全体像を把握することができる「臨床プロセスチャート」。もう1つは各ユニット内での具体的な医療行為と、当該ユニットの目標状態および次なる移行ロジック(移行条件と移行先ユニットを示すもの)からなる「ユニットシート」である(詳細については、本誌2005年11月号特集「医療安全と質を保証する患者状態適応型パス統合化システムの開発と実際」参照)。

現在、診療科ごとの「臨床プロセスチャート」と「ユニットシート」からなる「PCAPS 標準コンテンツ」が続々と開発されており、シンポジウム会場前では13領域にわたる項目のPCAPS 標準コンテンツがポスター展示され、それらを前にした参加者は活発な意見交換を行っていた。

PCAPS 開発研究班の主任研究者飯塚悦功氏(東京大学大学院工学系研究科教授)が本研究のねらいと今年度の計画・進捗状況について説明。次

に同研究班の水流聡子氏(東京大学大学院工学系研究科助教授)と棟近雅彦氏(早稲田大学理工学術院教授)によりPCAPSの解説が行われた。さらに、本研究の技術を利用して、医療電子機器メーカーを会員として研究班とともに電子カルテの開発・実装に向けた活動を行なう「PCAPS-IMT コンソーシアム」(本年4月設立)について説明があった。そのなかで水流氏が「(本研究を)研究だけで終わらせない」と語った通り、PCAPSという知財の臨床での活用がこれから本格的にめざされることとなる。

続いての標準コンテンツの相互レビューワークショップでは、コンテンツ開発チームのリーダーである医師らにより、担当領域のコンテンツの解説、および活発なディスカッションが行われた。

そして、質経営ツールとしてのPCAPSについて考えることを目的としたセッションが組まれ、まず「DPC 導入病院における質経営意識の必要性」と題して、飛永晃二氏(健康保険諫早総合病院院長)が講演を行なった。その後のパネルディスカッション「DPC 評価改善ツールとしてのPCAPS 電子カルテの可能性」では、飯塚氏をパネルリーダーとし、医療界を牽引する8名の病院管理者が、DPC時代における病院経営を支援するツールとしてのPCAPSの意義や、今後の展望について、ディスカッションを繰り広げた。

● 本誌編集室